さらなる飛躍に向かって

今年で10周年を迎えた「ほんなもん体験」。心の高まりを求め、この松浦党の里を訪れる人たちのため、そして、この地で暮らす人たちの新たな活力を生み出すために、さらなる飛躍に向かって、新たな一歩を踏み出しました。

10年の節目を迎え

松浦党の里ほんなもん体験 10周年記念式典

松浦党の里ほんなもん体験の10周年を記念する式典が2月10日、文化会館で開催されました。

式典には、来賓および一般社団法人まつうら党交流公社の会員など、約400人が参加。事業開始10周年を祝うとともに、さらなる事業の充実に向け、努力していくことを確認しました。

また、記念式典では、松浦市における教育旅行事業の理念の普及と発展、並びに観光開発と交流発展への多大な功績を称え、体験教育企画代表の藤澤安良（やすよし）氏とまつうら党交流公社に感謝状が贈られました。

そのほか、事例発表や体験者発表などが行われ、事例発表では、ほんなもん体験に取り組む14団体の中から、鹿町小佐々体験振興会・田平体験振興会・青島体験振興会の3団体の各代表が、事例発表を行いました。

ほんなもん体験の担い手（受け入れ民家・体験インストラクター）としての経験から、青少年の健全育成や生きがいづくりといった精神的効果や副収入の増、地域への財政的効果を評価しながらも、「修学旅行生だけでなく、一般の旅行者を取り込むような努力が必要」「副業ではなく、中心的な事業として確立できれば、農漁業の後継者不足の一助となるのでは」「担い手後継者の育成」といった課題を提起しました。

体験者発表では、滋賀県立長浜高校の修学旅行で体験した三浦ちはるさんと磯野由希実さんが、上志佐での民泊体験の思い出を発表。「松浦は第二のふるさと」と題した心温まる発表に、会場内は感動に包まれました。

「生きる力」を育む者として

また、記念式典では、体験教育企画代表の藤澤安良氏を講師として、『「10周年を節目に」～さらに発展する未来に向かって～』と題して、記念講演が行われました。

藤澤氏は、講演の中で、体験旅行の現状などについて説明した後、「皆さんは、体験旅行に訪れた人たちの人生を変えるような出来事を担っています。そのことに誇りを持って、取り組んでほしい。この事業に完成はない。日々研さんに励み、崇高な理念を持って進化していかなければならない」と関係者を激励しました。

◆ interview

一般社団法人
まつうら党交流公社
理事長
神田　厚（あつし）さん

おかげさまで、「松浦党の里ほんなもん体験」は、10周年を迎えることができました。これも皆さまのご理解とご協力があったからこそと心から感謝します。

受け入れ数も順調に増加し、今年度は約28,000人が見込まれています。

10周年を迎え、今一度しっかりと基本理念を確かめ、さらなる事業の充実を図り、地域に愛され、そして必要とされる公社となるよう、関係者一同、精一杯頑張りたいと思います。今後ともご支援・ご協力をよろしくお願いします。

10年の軌跡

【平成14年1月】
松浦体験型旅行協議会設立
【平成15年3月】
松浦党の里体験観光協議会発足
【平成15年5月】
青島地区で修学旅行生の受け入れが始まる
【平成18年4月】
特定非営利活動法人　体験観光ネットワーク松浦党設立
【平成19年2月】
第4回「全国ほんもの体験フォーラムinながさき」開催
【平成19年3月】
第4回オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）受賞
【平成19年11月】
長崎県県民表彰特別賞受賞
【平成20年1月】
第3回JTB交流文化賞優秀賞受賞
【平成21年3月】
松浦体験型旅行協議会、松浦党の里体験観光協議会および特定非営利活動法人体験観光ネットワーク松浦党解散
【平成21年4月】
一般社団法人まつうら党交流公社設立
【平成24年2月】
第2回地域再生大賞九州・沖縄ブロック賞受賞

たからもの

「ほんなもん体験」を終えた体験者と担い手の心の中には、ほんのりと温かな思い出が残ります。

思い出は、体験者と担い手を結ぶ架け橋となり、各個人にとって、生きる力を生み出す「宝物」です。ここでは、体験に参加した体験者と担い手の思い出を紹介します。

担い手 interview

山下　興範（くみのり）さん
（星鹿・青島、53）

私は、事業開始当初から「ほんなもん体験」の担い手として参加しています。最初は、こんな田舎にお客さんが来てくれるのか半信半疑でしたが、説明会や講演会に参加するうちに、私たちの生業を体験することで修学旅行に来る子どもたちが喜び、たくさんの人が来るようになればと思い、始めることにしました。

実際に受け入れてみると、子どもたちは、私たちの日常の仕事ぶりに驚き、感動してくれます。帰るころには心も打ち解け、「また来るね！」と言って帰ります。そんな子どもたちの様子を見るのが大変うれしく、何より励みになります。

また、子どもたちの中には、「何年ぶりかに朝ご飯食べた」「家族でご飯を食べることがない」「手料理をあまり食べたことがない」という話をする子もいます。家族関係が希薄になった現代の家庭環境を象徴するような話で心が痛みました。この体験で家族の大切さ、心のつながりや触れ合いの大切さを感じてほしいと思います。

私自身、この「ほんなもん体験」に参加し、心がどんどん満たされていくのを実感しています。

上志佐地域の風土は、優しさが生きるみんなが安心して住める場所。子どもたちを受け入れるには適した所だと思っています。

「ほんなもん体験」を通じ、この地でたくさんの子どもたちと交流を行ってきました。

私は、離村式のときによく修学旅行生たちへ、この体験を通じて「5つの優しさ」に出会っていると話します。5つの優しさとは、体験旅行に来た皆さんのことを気遣う「①両親の優しさ、②先生の優しさ、③インストラクターの優しさ、④民泊先の家族の優しさ」と皆さんが心配かけまいと私たちを気遣う「⑤生徒さん自身の優しさ」の5つです。

人間関係を築くには、お互いを認め、思いやる気持ちが必要です。この「ほんなもん体験」の中には、それを実感できる要素がたくさん含まれています。

また私は、『プラス1（生業とは別に人や地域のためにできる社会貢献活動）』の考えを大切にしています。今の私にとって、この考えを満たしてくれるのが、「ほんなもん体験」です。体験に来る子どもたちのために、そして地域の活性化のために、これからも頑張っていきたいと思います。

金子　庄一郎（しょういちろう）さん
（志佐・横辺田、58）

担い手 interview

体験者 interview

三浦ちはる さん（東京都在住：写真左）
磯野由希実（ゆきみ）さん（滋賀県在住：写真右）

私たちは、平成17年に高校の修学旅行で上志佐地区の民泊を体験しました。

民泊先には、私たちのことをお客様ではなく、家族の一人として迎えてくれる優しいご夫婦がいました。

とは言え、他人同士であることは間違いなく、最初のうちはかなり不安でしたが、みんなで料理を作ったり、ご飯を食べたり、生活を共にするうちにだんだん楽しくなってきました。1つのことをみんなでやりながら一緒の時間を過ごす。そうすることで、人はここまで深く関われるようになるということに気付きました。このことは人生の上でよい経験となり、最高の思い出となっています。

実は私たちは、体験にくる前に大ゲンカをし、そのまま民泊体験に入りました。そこで、家族同様に接してもらううちに、いつの間にか私たちの仲も元通り。今まで以上の大親友として今でも仲良くしています。

民泊先のご夫婦のことを今でも『お父ちゃん』『お母ちゃん』と呼んでいます。社会人となった今、二人に自分たちの頑張ってる姿を見てもらいたい。そのことが大きな心のよりどころにもなっています。

ほんなもん体験では、普通の修学旅行では、絶対味わえない体験ができました。今でも友達との会話の中で話題になるほどです。

大好きなお父ちゃんとお母ちゃんがいるこの町。人生の節目には必ずここに帰ってきます。

※「ほんなもん体験」に訪れた、たくさんの人から多くの手紙やメッセージが寄せられています。